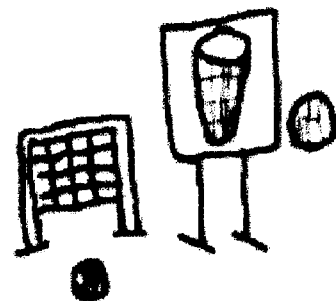


進路のしおり

特集「地域で生きる＝すまい・あそび・すけっと」

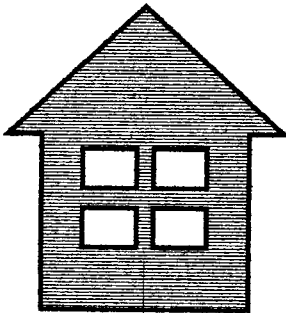
目次	
すまい	2～5
あそび	6～9
すけっと	10～13
資料	14～15
・障害者プラン ・施設紹介 ・進路先一覧	
あとがき	



- 埼玉県高等学校進路指導研究会
障害児教育部会・肢体不自由養護学校小委員会
- 埼玉県肢体不自由養護学校進路指導研究会
- 埼玉県肢体不自由養護学校校長会

すまい

障害のある人達が豊かに暮らすための「すまい」には、様々な条件が必要になってきます。現在、障害のある人達が暮らしている「すまい」のかたちやそこに住んでいる人達の様子を紹介します。



施設で楽しむ

・身体障害者療護施設

常時介護を必要とする身体障害者が入居し生活する場。大樹の里には現在50名の方が入居し、自治活動や地域活動、クラブ活動など行っています。

入居者もボランティア活動

－「大樹の里」施設長－

以前は入所施設のイメージは、「収容」という観がありました。しかしここでは、利用者が主人公になり住みやすい場所にしようという理念のもと、いろいろな活動に取り組み成果をあげています。

たとえば、日常生活や諸行事、イベントなどの企画や運営を自治会が行ったり、利用者が、自分たちでできる地域活動やボランティア活動（空きカン拾い、小学校校門前での立哨活動、在宅障害者の安否確認活動等）を行ったりして地域社会での活動に生きがいや喜びを見出しています。

また、ここはボランティアの出入りがたいへん活発でもあります。その人数は1日平均6～5人。年間なんと2400人にもものぼります。ボランティアの皆さんには、クラブ活動の講師や外出時の介助、自動車の運転、清掃活動などをお願いしています。

主人公は自分たち

－入居者・自治会長、副会長－

たくさんのクラブ活動があるようですが。

現在は、音楽、詩吟、手芸、皮工芸、書道、短歌、絵画、園芸、民謡、水墨画、将棋などのクラブがあり市内や近郊の大会に参加をしたり、展覧会に出展したりしています。講師は地域のボランティアさんなどに依頼し、地域の皆さんも参加をして一緒に楽しみながら活動しています。

ここでの生活で、不便に思うことは何ですか。

ここは外出が自由です。電動車椅子やキャブを使って外出しています。しかし、車の運転手さんの人数に限りがあり、思うように外出できないのが悩みです。

健康安全面での不安はありますか。

看護婦さんが日勤で常駐し、服薬の管理や健康相談などやっているのが安心です。また、市のリハビリ教室へも積極的に参加するようにしています。

部屋割は、どのように決めていますか。

利用者が話し合いで決めています。ほぼ3年間で部屋割を替えますが、問題等が出た場合は随時、対応する形をとっています。

（ほとんど1部屋4人利用）

介助者が配慮して欲しい点は。

基本的なことですが、どういった介助が必要なのか介助される側に立って理解をしてほしいこと、プライベートな面にまで立ち入ってほしくないことですね。

それと、常識やマナーを持って接してほしいことです。

役割をもった生活を

－生活指導員－

〔ご本人も障害がありながら直接入居者と接し、相談活動などの援助をしています。〕

ここでは、施設を家やアパートと考えています。職員や入居者はすべて〇〇さんと呼び合うようにしています。プライベートな面も保障していきたいのですが、障害が重度になるとお互いに助け合うという面で個室というのも難しいのが現状です。

また、生活すべてが施設の中で行われるため、目的を持った生活や活動意欲という点で課題がありそうです。このことは批判だけで終わらずに、今後どのようにしていくのか考えていくことが大切でしょう。できるだけ何らかの役割や生きがい、楽しみを探しながら生活していけるようにしています。

そのような活動の中で、地域社会の人たちも入居者の存在を認めているようです。

連絡先

身体障害者療護施設「大樹の里」

TEL 0429-64-3965

アパート

☆篠原由美さんのプロフィール

高知県室戸市で双子の妹として生まれ、父親の仕事のため1歳のとき広島に転居。小、中学部は養護学校で寮生活をおくる。高校は自宅から通える私立高校を受験。卒業後、職業訓練校で1年間縫製を学ぶ。その後、在宅生活を送りながら地元の社協に出入りしているときに大学の通信教育のことを知り入学。父親の仕事のため大阪、東京と引っ越すが、大学は社会福祉学部を9年間かけて卒業。現在日中の活動として東京都の生活実習所（福祉園）に通所している。

アパート暮らしのキッカケ

東京に慣れたころ、父の四国への転勤の話が決まり、「付いてくるかどうか決めろ。」と言われました。その時は大学の4週間もの現場実習を控えているときで、頭はそのことでいっぱい。「返事は1ヶ月待ってほしい」と答えて現場実習に入りました。この実習が一人で暮らせるキッカケにもなったようです。

通勤することが無理なので、好意で寮の部屋を借りることができましたが、食べることや掃除、洗濯等生活に関する事は自分で考えなければなりません。食事は出前やコンビニのお弁当等で済ませる方法を思いつきました。身のまわりのことは時間さえかければ自分でできたので、部屋があって時々掃除などをしてくれる人がいれば独り暮らしは出来ると漠然と感じました。

この4週間で、多くのことを考えたり、経験したので大きな自信になりました。

アパート探しに四苦八苦

アパートを探し始めたものの、親に心配させたくないだったので、福祉園の帰りや遅刻したりして探しました。でもほとんどの不動産屋は門前払い、ドアも開けてくれませんでした。

た。話を聞いてくれても「あんたみたいな人が一人で暮してどうするの。」と言われ、社会の厳しさを思い知らされました。2〜30軒回ったところやっと一軒見つかりました。

その時、はじめて父母に話をし、父と一緒に物件を見に行きました。父は「静かすぎて夜など出入りするものに物騒だから他のところがいいじゃないか」とか「他にも沢山あるから」と言い、障害者や高齢者に物件を紹介しなくても不動産屋はやっていけるし、貸してくれる所などめったにないという社会をわかろうとしました。しかたなく父と日曜日に不動産屋回りをして、たいへんさをやっとわかってもらいました。

生活するうえでの改造

アパートの入り口には段差があるため、鉄板を乗せてスロープにしたり、電動車椅子を外でも充電できるようにしてもらいました。流しの水道のレバーや湯の温度調整器の取り付け、風呂場やトイレの改造、さらには玄関の段差の解消などを改造しました。費用については、重度障害者居宅改善整備費から助成していただきました。



遊びは人生のスパイス

あそび

☆関根善一さんのプロフィール

今年42歳。7年前に埼玉から町田市に転居。町田ヒューマンネットワーク（障害者自立生活センター）の常勤職員で自立生活プログラム担当。仕事のかたわら音楽グループ“ポピーズ”や障害のある人たちが構成している劇団“態変”などの活動をしている。高性能の電動車椅子で街を闊歩。妻と子ども二人の4人暮らし。

・自立生活プログラムでは遊びを重視しているそうですが、それはなぜですか？

人間関係を学んでいく基本は、「遊び」。そこで社会性や自分で責任をとることなど学んでいきます。ところが障害者の育ちの中では、遊びが訓練だったり、子ども同士の関係が奪われてしまっていたりします。そこで技術的なことよりも生活する意欲を引き出すために、みんなで遊びにいこうということで、遊園地に行ったり飲み屋にいたりしています。

・関根さん自身で遊びについての小さい頃の思い出はありますか？

近所の友達とは外で真っ黒になって遊んでいたけど、学校では「コマ回し」など訓練としてやらされたことを強く覚えています。コマ回しに興味がなかったわけではないけれど、それはもう遊びでも何でもなし。僕は、歩くこととりハビリを捨てたとたん、自由になったような気がします。

・「ポピーズ&フレンズ」というバンドや障害者の劇団「態変」をやっているそうですが

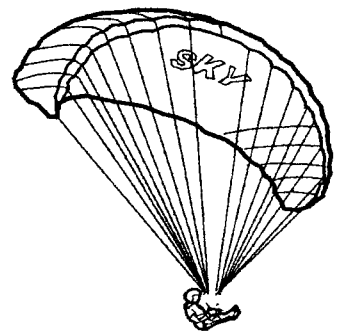
自分史の中で、音楽に出会ったり、演じることに出会ったりしました。仕事だけの生活ではないところで自分を表現することは、自分を豊かにする意味でもとても大切なことだと思っています。養護学校卒業後仲間とグループを結成し、障害者が自分自身の生活や想いを歌うプロテストソングとしての活動をしたり、演劇では「生命」ということをテーマに自分の不自由な体を使って生きることの大切さを表現していきたいと思っています。

・とってもアクティブな関根さんですが、その信条はなんですか

まずは、生きたいように生きるということ。今までは障害があるが故に、訓練やりハビリを強制されてきた。障害を個性として考え、できるだけ同世代の仲間とたくさん遊び、多くの経験をしてほしいと思う。そこからなにがしたいのか、どう生きたいのか生まれてくるのではないだろうか。

・最後に関根さんにとって「遊び」とはなんですか

人生の半分は遊びなんだろうと思う。遊びは本来無目的、でもその中で結果として仲間同士の関わりや共通の体験から関係性の深さが生まれてくる。人生には、遊びと遊び心が必要ではないだろうか。人は夢が無くては生きていけない。それは障害者もなにも関係ない。自分自身の人生を豊かに生きるためにも、自分自身を取り戻すためにもたくさん遊んでたくさん夢を持ってほしいと思う。



「あそび」は、人生を豊かに過ごすためには無くてはならないものです。人生を味わうことに障害もなにも関係ありません。しかしながら今まで障害のある人達にとって、遊びは訓練であったり、遊ぶこと＝人生を豊かにすること、まで想いが及んでなかったのではないのでしょうか。ここでは遊びに対する考え方、実際の様子、遊びへのお誘いなど、人生をより豊かにしていくためのヒントをあげてみました。

旅行

養護学校在学中のある家族の海外旅行の例を掲載しましたが、近くの河原で家族と一緒にデイキャンプで自然を楽しむとか、電車に乗っての小旅行など、身近なところで小さな旅気分を味わうのも心のリフレッシュになります。



食事についてはメニューを細かく説明してもらい、子どもが食べやすい魚料理、ジャガイモ料理などをおいしく食べてきました。レストラン、ホテルなどには障害者用スロープが必ずあり、段差がないので車椅子の移動はとても楽でした。

町中で1ボックスカーの後ろへ板2枚を置き、スロープで簡単に乗り降りできるタクシーを見かけました。これを利用し、中年の障害者と奥さんがピザ屋で仲良く食事をしているのです。うらやましい限りでした。また他の障害者ともすれ違いましたが、車椅子のカラフルで機能的な様子にびっくりしました。

ドイツ旅行

夏休みを利用して、家族でドイツ旅行にいったて来ました。

ライン川沿いの両岸に多くの古城がある伝説の地ローライ。ロマンティック街道の中心で中世の城壁や木骨造りの家並び、石畳の道路のローデンブルグは、絵のように美しい都市でした。古城街道のハイデンベルグ城は、山の斜面に築かれ中世の戦争で壊されたままの姿を見せてくれていました。

有名な高速道路アウトバーンは、一部区間をのぞき速度は無制限で、料金所がないので、一度も渋滞がありませんでした。4車線のまっすぐの道路がどこまでも続くので車に酔うこともなく、すてきな景色をたくさんみることができました。

旅行するにあたり、梅雨明けの暑苦しい日が続いたので健康第一にと考え、日頃の訓練を十分行いコンディションづくりに努めました。

さて、旅行会社や航空会社へは、事前のコンタクトとして障害児がいる旨を伝えました。そして、希望として機内食をきざんだ状態にしてもらうこと、機内用車椅子の手配をお

願いました。また空港では自分の車椅子でどこまで行けるのか確認したところ、機体のすぐ近くまで行けることがわかり安心しました。機内の椅子は一般の方と同じなので、抑制帯やクッションを持ち込み、姿勢を保持するようにしました。飛行中は、クルーの方々がなにくれとなくお世話をしてくれました。

ドイツ国内ではレンタカーを利用して移動したのですが、「駐車禁止除外指定車両」の英文訳と、取り外し可能な「障害者マーク」を持っていくとよいと思います。観光地では、一般の車より近いところに障害者用駐車場があり、無料でした。

私たちの場合ドイツ人の友人ご夫婦が案内や通訳をしてくれ、ドイツの家庭料理なども味わうことができました。言葉のでない息子ですが、お互いの笑顔で心が通じ合ったようです。中学2年の夏、心と体と今後の生活に大きな何かをもらうことができました。そして、ドイツの人々の優しい心もいただいてきたような旅行でした。

(W養護学校 O君母親)

トラベルネット

JTBやぜんコロなどが共同出資して作った旅行会社。障害者や高齢者など、今まで旅行を楽しむことの対象になりにくかった人たちをサポートするために設立された。障害当事者のノウハウをもとに修学旅行やバック旅行なども企画している。

連絡先 株式会社トラベル・ネット
TEL 03-3204-8901
FAX 03-3204-8827

